

## ミニ・シリーズ:農に関わる営みと暮らし ～日本における様々な動き～

### その1: 帰農、そして農楽—農業を営む若者、就農を志す若者

我々の身の周り、衣・食・住において高度経済成長・バブル景気などによって非自然的な方向に振れ過ぎてしまった振り子が反作用で戻る動きが昨今加速している。農という視座からも同様であるが、それらは本来人間が持つ動物的本能に基づいた危険回避をとる行動からきているのではないだろうか。農・林・水産といった第一次産業が主役の時代が再び少しずつ戻りつつあると感じさせる。本ミニ・シリーズでは、農におけるそのような動きの一部を紹介していく。崖上から転落し未来への展望を未だ拓けずにいる日本のそれは、今後、途上国が進むべき道において同じ轍を踏まないための重要な視点を与えているように思う。

貨幣経済に基づいた第二次・第三次産業が主流となった今の日本社会の行く末に不安を感じた若者達が、都会を脱出し農村を目指す動きはいまや稀ではない。人間・社会関係の中において現金を稼ぐ労働を捨てて、生きるために自ら食うものを作る農耕労働を目指そうとしている。過疎地において元気に生きる若者達が全国にいる。山口県柏村に住む宮田正樹氏、36歳。9年前に戸数6戸のこの村に就農した。標高300mにある3反8畝の棚田で無農薬無化学肥料栽培の米を作り、野菜を自給し、450羽の平飼い養鶏の自然有精卵により生計を立てる小規模農家である。就農当初から思うような稲作ができず、ヒヨコがネズミに襲われたり、米や鶏卵の販売ルートの開拓など決して楽な道のりではなかったという。現在も棚田を荒らすイノシシに頭を悩まし、沢水に頼る棚田への夏場の水の供給や、管理が行き届かず荒廃の進む裏山を憂う日々が続く。しかし、集落の奥が行止りで道行く人々も少ないため騒がしい人工音は皆無であるし、早朝、下の谷からモクモクと雲が沸き上がるさまは実に感動的である。納屋と蔵に挟まれた藁葺きの民家を住まいとし、薪で風呂を焚き、生活水を井戸水で賄い、裏山から食材を採ってくる暮らしは、必要以上のお金を必要としない本来の豊かなそれであろう。「ここへ来て本当に良かった。そして、ここを訪れる人にも自分の故郷のように感じてもらいたい。」と彼は話した。

将来、農業を目指す若者達が集まり共に学ぶ場「帰農志塾<sup>きのうしじゅく</sup>」は、栃木県烏山町にある。1982年、戸松正氏が日本農業の後継者を育てることを目的として設立し、現在は長男の光生氏(31歳)が塾長を務め、これまで70余名が卒業し全国で就農している。およそ8haの畑で有機・無農薬栽培で約80種類の野菜と平飼い養鶏(約600羽)を主として営み、150世帯の宅配会員と提携する他、スーパーやデパートへも出荷する。塾は研修費不要の全寮制で、研修期間は原則2年間として相互研鑽を目的とする共育を行う。現在は、20歳代前半の男女合わせて10人の塾生が研修を積んでいる。塾生は、圃場において作物生産を行いながら営農栽培技術を学び、圃場外においては配送や集金を行う中で営業・顧客開拓をも任せられ人や社会とのつきあい方を学んでいく。「土と自然と共に生きたい」と願う若者が帰農志塾の門を叩き塾生同士で切磋琢磨しながら共に学び卒業し、就農していく。比較的年齢の若い塾生達は、それなりに悩みや苦労を抱えながらも、その姿は活き活きとしており「ここで学ぶことはとても楽しい。」と笑顔で一樣に答える。都会に住む同年齢の若者には見ることのなかった真っ直ぐに見つめるキラキラと輝いた目と、充実感に溢れた表情や言葉が大変印象的であった。

人間の思想や感情を音で表現する芸術＝「音楽」という言葉がある。それならば農で表現する「農楽<sup>のうがく</sup>」という言葉があってもよいのではないか。我々が貨幣経済社会という枠の中で暮らすために、全くお金と無縁という訳にはいかないが、それでもそれは二の次で、音を楽しむのと同様に自然の中で農を楽しむことが生きるということの第一義であることを彼らは示しているような気がする。



自然有精卵を生む平飼い養鶏



宮田氏が営農する棚田



帰農志塾塾生による野菜苗の植付け